ブータンのロ・ドゥク（南の雷龍）伝統

ゲンボ・ドルジ
翻訳：堀内俊郎

幸福の国ブータンは、9世紀初めに、ウゲン・グル・リンポチェ（訳者註：パドマサンバヴァ）によって嘉せられた。その後、ランチェン・ペルギ・シンゲー、ドゥプチェン・ダムパ・サンゲー、ンゴクトゥン・チューク・ドルジ、ツァン・ツゥンデ・ダクパ、ロレーパ・ダクパ・ワンチュク、パジョ・ドゥクゴン・シクポ、マハーパンディット（大学者）ナギ・リンチェン、ドゥプチェン・ツァントン・ギェルポ、宝の発見者ドルジ・リンパ、比類なきギェルワン・チュージェー、チュージェー・ドゥクパ・クンレー、卓越したンガワン・チューキ・ギェルポ、ギェルセー・ンガキ・ワンチュク、ミパム・チューゲル、ミパン・テンピ・ニンマ、そしてシャプドゥン・ンガワン・ナムゲルなどといった偉大なる師たちが、インドやチベットからブータンにやってきた。宝の発見者であるペマ・リンパ、ドゥンセー・ンガワン・テンジン、70人のジェ・ケンポ（訳者註：宗教界の長）やさらに多くの方々が、この国で生まれた。かくして、独特の宗教的伝統が形作られ、今日に至るまで途切れることなく保持されてきた。ドゥクパ・カギュ派は、国教でありブータン僧団の伝統である。

カギュ派の歴史

カギュ派は、師から弟子へと伝えられた口伝が断絶なくつながっていることを強調する。「カギュ」という語は「口伝の（カ）連鎖（ギュ）」を意味する。カギュの系統はブッダ・釈迦牟尼にその起源を持ち、成就者であるティローパ、ナローパ、マルパ、ミラレーパ、ガンポパもしくはダクポ・リンポチェとしてよく知られている方へと連なる。ガンポパのダクポ・カギュは、バロム・カギュ、ツェルパ・カギュ、カムツァン・カギュ、パクドゥ・カギュと呼ばれる4つの系統へと発展した。

パクドゥ・カギュから、8つの分派が発展した。つまり、ディグン・カギュ、タクルン・カギュ、リンレー・カギュ、ヤルサン・カギュ、トプ・カギュ、シュクセー・カギュ、イェルパ・カギュ、マルツァン・カギュである。リンレー・カギュは後のツァンパ・ギャレーの時代に、ドゥクパ・カギュとして知られるようになった。このグループ分けは、実践者の純粋な数の成長によって起こった。その伝統は、ハゲワシが18日の間飛行する範囲にまで広がったと信じられてきている。人口の半分はドゥクパであり、ドゥクパの半分は禁欲の放浪者であり、禁欲の放浪者の半分は〔修行〕成就者であると知られている。

ドゥクパ・カギュの伝統

ドゥクパ・カギュは、さらに、3つの派に発展した。つまり、トエ・ドゥク、バル・ドゥク、メ・ドゥクである。バル・ドゥクも、ベー・ドゥクとロ・ドゥクとして知られる2つの伝統に成長した。ブータンの伝統は、9つの尊格と5つの刻印された聖なる教示の実践を強調するロ・ドゥク（訳者註：南の雷龍）の伝統である。9つの尊格の実践は、ヴァジュラサットヴァ、アクショーブヤ、アミターユス、アヴァローキテーシュヴァラ、内部のチャクラサンヴァラ、13の神格のチャクラサンヴァラ、ヴァジュラヨーニ、怒れるヴァジュラパーニ、そして、マハーカーラ率いる法の守護者たちである。

5つの聖なる刻印された教示の第1は、大印契（マハームドラー）、大空印、心の本性に関する卓越した瞑想で

ある。

第２は、ナローパの６つのヨーガの瞑想（訳者註：いわゆる、ナーローの６法）、つまり、身体の心臓のヨーガ、幻の身体のヨーガ、明晰な光のヨーガ、意識の移転・魂の遷移のヨーガ、夢のヨーガ、そして、〔生と死の〕中間領域の状態（中有）のヨーガ（訳者註：順に、内的火、幻身、光明、遷有、夢、中有）である。

第３は、６つからなる平等さ（一味）の伝達、もしくは、一切の現象が一味（平等）であることを体験するための６つの教えである。それらは、概念化を道とし、妄想を道とし、病気を道とし、神や悪魔を道とし、苦を道とし、死を道とするものである。

第４は、７人の仏陀からツァンパ・ギャレー・イェシェー・ドルジへと授与された７つからなる教えである。これは、ブータンでのみ、また今なお実践されている、ドゥク派の伝統に特有の実践である。この実践の特有なところは、この実践では、７人の仏陀、７人の受け手、７つの教え、７人の眷属、７つの礼拝、７つのマンダラへの供養が、７ヶ月と７日にわたってなされることである。

第５は、グル（師）・ヨーガである。これは上記の他のすべての実践にとって最も本質的であり基盤となる実践である。この成就法（サーダナ）はグル（師）への懺悔という深遠な道を扱う。

ブータンへの仏教伝来

仏教がブータンに最初に伝来したのは７世紀のソンツェン・ガンポ（629–710）、第33代のチベット法王の在世においてである。彼はチベット内や周囲に数百の寺院を建て、国土の位置や地理的な場所によってその地域にはびこっていたネガティヴな力やエネルギーを鎮めた。11の寺院がブータンに建立され、そのうち８つは無傷で残っていると信じられていた。それらはハ（Haa）地域におけるラカン（訳者註：寺院の意）・カルポとラカン・ナクポ、パロ地域におけるケチュ・ラカン、ペルナン・ラカンもしくはその地域ではパナ・ゴエンパとして知られているもの、ブムタン地域におけるジャンパ・ラカン、アヌ・ラカン、ゲネー・ラカン、チュチ・ラカンである。ソンツェン・ガンポは、自分がシャプドゥン・ンガワン・ナムゲルとしてブータンに〔生まれ変わって〕戻ってくることを示すために、ブータンにこれらの寺院を立てたと信じられてきた。『プンスム・ツォクパ』によれば、一切智者パドマ・カルポによって断言されていることであるが、観音〔菩薩〕の連続する生まれ変わりの中で、ソンツェン・ガンポは３代目の、シャプドゥンは12代目の生まれ変わりである。

ロ・ドゥク（Lho drug、南の雷龍）の伝統

1616年にブータンの父であるシャプドゥン・ンガワン・ナムゲルが到着して以来、仏教が、ブータンにとって平和、幸福、統一の源泉となった。最初のゾン（訳者註：要塞。政治や宗教の中心となった）は1621年にチェリ（Cheri）に建てられ、僧団が組織され、たくさんのユニークな文化や伝統が発展する基礎となった。そして、２頭政治機構（訳者註：チョエシ制度。デシと呼ばれる俗界の長と、ジェ・ケンポと呼ばれる聖界の長の双方が、それぞれ政治・行政と宗教を担って統治を行う形態）が組織され、仏教がブータンの国教となった。「ディク・ラム・チュー・スム（Drig Lam Chos Sum）」または、行為、文化、仏教の信仰にとっての規範が、ブータンの伝統にとっての３つの基礎的な倫理となった。

このロ・ドゥクもしくはブータンの仏教信仰は、２つのカテゴリーから成る。つまり、父法（パ・チュー）として知られる偉大なる父の伝統と、子法（プ・チュー）として知られる息子もしくは伝承者たちの伝統である。

父法は、ダムガク・ドンポ・スムディルもしくは３つの聖なる教誡の源泉、つまり、

1．トクパ・ガムポパ：見解あるいは哲学的立場への源泉である大印契（マハームドラー）の教えは、偉大なるヨーギンであるミラレーパの太陽の如き弟子であるガムポパ・ソナム・リンチェン、チュージェ・ダクポ・ラジェから、私たちに伝えられた。
2．ダムガク・レーチュンパ：６つからなる伝承（訳者註：前出の「５つの聖なる刻印された教示」の３番目を参照）などという聖なる教示にとっての第２の源泉は、ミラレーパの月の如き弟子であるレーチュンパ・ドルジ・

ダクパから伝えられた。

3．テンデル・コウォパ：7つの聖なる教示にとっての第3の源泉は7人の仏陀から授けられ、パルデン・ドゥクパのカギュの伝統の父であるチュージェ・ツァンパ・ギャレー・イェシェー・ドルジに由来する。

子法は、「カル・チク・ヤン・スム（Gar Thig Yangs Sum）」から成る。カルは様々な儀礼の踊りを意味し、チクはマンダラの作製や画描きなどの職業訓練を意味する。ヤンは儀礼的読経や、様々な楽器の使用を意味する。これらは、世界の他のところで広まっている他の諸伝統と比べて、独特でユニークなものである。

儀礼と易行

我々ブータンの伝統における儀礼の業務はとてもユニークで広範囲にわたる。我々は、世界の他のどの伝統とも独特に異なって実践される17巻以上の儀礼テキストを持っている。楽器やそれらの用い方も、チベットの伝統のそれとすら、概して異なっている。チベットとは多くの儀礼文献を共有するものの、音楽のリズムやメロディーは独特に異なっている。これらは17世紀、ブータンの父シャプドゥン・ンガワン・ナムゲルと最初の統治者ゲルセ・テンジン・ラプゲーの治下で発展した。

ダルマ（法）は、すべての生き物の心にある執着、怒り、無知などといったような汚れを浄化する道である。それは終わりなき輪廻の苦しみから生き物を解放する方法であり、彼らを悟り、つまり永遠なる至福の状態へと導く。

苦しみは、この世で非常に多くの異なった形態をとり、それを止めるために出来ることは少ないと感じられる。病気、老いや死以外にも、戦争や環境災害や貧困がある。私たちの心あるいは内面の意識は、かき乱す感情によって常に悩まされている。ゆえに、生き物として、私たちは、奇跡が起こってこれらすべての悲惨さが、幸福と平和な世界に変わることを願っている。

金剛乗の伝統によれば、これは易行（簡単な実践）によって可能である。願い祈ること、功徳を捧げること、美徳を喜ぶことである。これは単なる善い心や善き意図を持ったジェスチャー以上のものである。誠心誠意、実践した時に、それらは、自分や他人といった限定された考えを超えることに導き、ゆえに、智慧と慈悲を呼び起こすのである。儀式の間ずっと、慈悲と智慧の結合は失われない。この哲学は、実際に奇跡を起こしうる。私たちは、自身の心の状態、一切の現象の深遠な状態、自身の感情を含む空性を見ることができる。

情動をよりよく理解した結果として、私たちは、それらを監視し変えるためのより深遠なスキルを開発する。いつもは心をかき乱すものである情動を変え、習慣的なパターンを永続化する能力を得る。空性は現象の本質であるので、実践を通して、空性を促進し悟ることができる。もしも空性が一切の現象の真実実際の本質でないとしたならば、それは幻であり、実践はいかなる結果も生まないであろう。しかし、空性は一切の現象の状態なのであり、ゆえに、これらの儀礼の行いは、見、聞き、感じ、視覚化し、〔心の〕平穏、穏やかさを達成し、悟りを得ることへと、実践者や、関係する人々を導くのである。

4つの異なったアプローチ

ダルマの実践的な部分に話しを戻そう。4つの異なったアプローチの方法もしくは手段がある。

1．より下の〔生存〕領域（訳者註：人間界よりも下の、餓鬼・畜生・地獄界）を苦しみであると見て、より高い領域へ生まれることを願求すること。これは「完全に世間的な乗（乗り物）」と呼ばれる。この実践の本質あるいはカギとなるものは、業（カルマ）、つまり原因と結果の法則に対して強い信仰心を持つことである。

2．輪廻全体を苦しみであると理解し、自己を〔そこから〕解放（解脱）することを選ぶこと。これは「基本あるいは根本の乗」と呼ばれる。この実践のカギとなるものは三宝（仏・法・僧）への帰依（保護を求めること）である。

3．輪廻を苦しみと見て、すべての生きとし生けるものが〔輪廻から〕完全な解放（解脱）することを選ぶこと。これは「大乗」の伝統と呼ばれる。この実践のカギとなる本質は、一切の生き物（衆生）に対して菩提心を起こ

すことである。

4．一切の現象や存在の本質を見て、悟りを得ること。これは「金剛乗」と呼ばれる。この実践のカギとなる本質は、グル（師）・ヨーガもしくは献身である。

最初の３つは、原因を道と捉える。それらはスートラ・ヤーナ（訳者註：経典（縦糸）の乗）と呼ばれる。４番目のものは、結果を道と捉える。これはタントラ・ヤーナ（訳者註：横糸の乗、タントラ乗）あるいはヴァジュラ・ヤーナ（金剛乗）と呼ばれる。スートラのアプローチは、悟りの源泉、つまり、功徳を積むことと智慧に注視する。タントラは、究極の達成である自己自身の心の本性を悟ることへ向けた手段や方法を扱う。

結論

周知のように、仏教は人間の本性を扱う宗教である。それは心の哲学であり、ゆえに創造の哲学である。その伝統は、智慧と空性の哲学を、適切な推論と体系的なアプローチを通して扱う。また、私たち個々人の心の本来的な状態を悟ることへ向けた様々な方法や手段も扱う。かくして、仏教は、音楽や読経といった力強い方法を用いることによって、人が悟りを得ることを可能とする。これらの実践に大いに励めば、この生涯の内に、完全な悟りを得ることができる。